

第26話 平安奠都

国の勢いが盛んになるにつれて、奈良の都も不便になってきた。

都は平安に遷された。今の京都がそれで、桓武天皇の御代から明治二年まで、1070余年の間、帝都はそこから動かなかった。

弊政を改められる

光仁天皇が御位に即かれて、第一に御心に懸けられたのは、道鏡のために全く乱れた政治を正しくして、すべてを元の通りに復されることでした。天皇は天智天皇の御孫で、ご即位の時に既に62才というご高齢でありましたが、もともとご賢明な上に、非常にご熱心にその事に当たられたので、ご在位12年の間に、世の中は全く見違えるようによくになり、人々はみな蘇った思いをしたということです。

第50代桓武天皇はその後をお承けになって、更にそのご事業を一層立派に成遂げられた。天皇は光仁天皇の御子で、御年45歳で、奈良の都でご即位になられたが、その頃の奈良の都は、御父光仁天皇が大いに弊風をお正しになったとはいっても、まだまだ奢りの風や何かはすっかり抜けきらず、人心にも緩みが見えていたし、わけでも文化の中心となっている僧侶共の中には、道鏡にかぶれた不真面目な者なども決して少ないとは言えなかったのです。

遷都のご決意

それに奈良は、大和の内ではいい処でしたが、国の勢いがますます盛んになって来て見ると、殆ど四方を山に囲まれている奈良の地は、他国との往来も不便だったりするので、天皇は、どこかに適当な土地を選んで都を遷し、大いに人心を新たにして、よいお政治をなさろうとお考えになった。

長岡京

けれども、永く帝都となされるのでありますから、狭い土地ではいけないし、要害もよく、水陸の交通も便利で、景色もすぐれ、気候もよいというように、いろいろの条件が揃っていなければなりません。

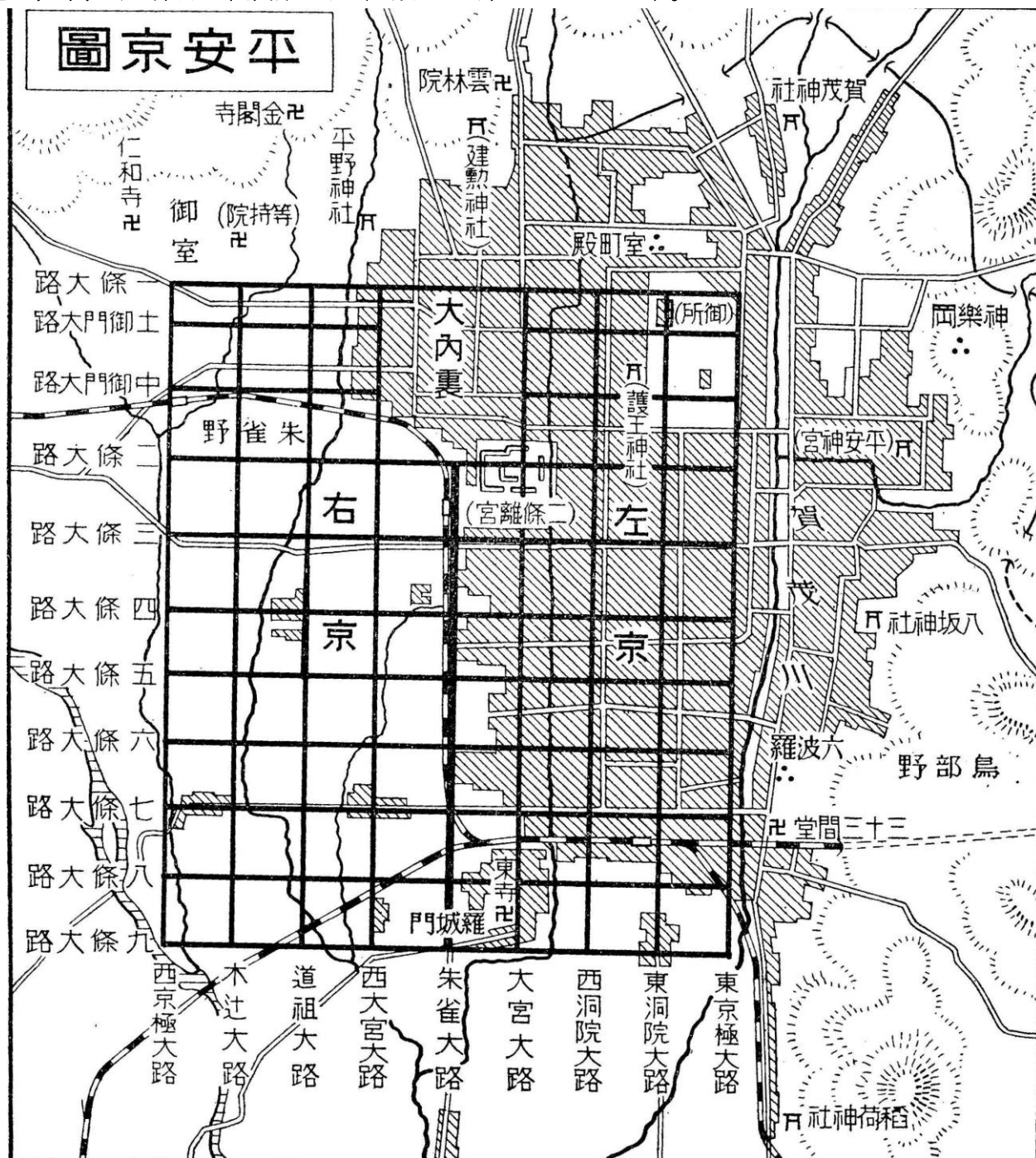
で、容易にどこと定めることも出来ずにいましたが、中納言藤原種継という者が、仰せを受けて方々を見て歩いた末に、ついに山背国乙訓郡長岡(京都府西南部)の地を選んで、そのすぐれていることを奏上した。それで、ご即位4年の延暦3年6月から其処に工事を始められて、その年の11月、まだ宮殿も役所も十分に出来上がらないうちに、早くも、天皇はこの新都にお遷りになった。

ところが、翌年の9月、この長岡京の造営を一切お任せになっていた藤原種継が暗殺され、ついで皇太子が俄かにお薨れになったりして、めでたくない事が続いたために、折角お遷りにまでなられた都の工事が一向に捗取らず、いつ出来上がるとも見込みが立たなくなった。

桓武天皇がこれをご心配になっておられた時に、ある日、忠臣の和氣清麻呂が、「山背(京都府)の葛野郡に宇太というところがありますが、なかなか景色もよく、其の上、東西北の三方は山に囲まれ、南の平野には宇治の大河が流れて居りますから、要害もよく、水利の便も申分がありません。そこの方が長岡よ

りも都としてはずっとよろしいように思いますが、御模様替えになってはいかがでしょうか？」と密かに申し上げた。

それで天皇は、表向きは狩猟に行かれるという事にして、たびたびその土地へおいでになって、よく様子をお調べになって見ると、清麻呂の申上げた通りでしたから、大いにお喜びになり、更にまた長岡の都をこの宇太村にお遷しになることとなされた。長岡の都のあったところは、今の京都府の西南、向日町の附近で、今、町の東方に長岡京の大極殿址の碑が建っています。



京都 平安京図

へいあんきょう
平安京

さて、宇太村の新都は、延暦12年11月に初めて工事を始められたが、今度は着々と調子よく運んで、翌13年10月に天皇はこの新都にお遷りになった。この地は、前に清麻呂も言ったように、東北西の三方を比叡、鞍馬、貴船、高雄、愛宕、その他の山々で囲んだ中に在って、東には賀茂川、西には桂川が流

第26話 平安奠都

れ、南の平野には宇治の大河がうねっています。

景色もよかったが、殊に要害がよかったので、天皇は、「この国の地勢は、自然に城のようになっている。此後は山背国を改めて山城国としよう」と仰せられ、また、「この新都に集まってくる民が、喜んで、口々に平安京と呼んでいるということだから、都の名にはそれを其のまま用いることにしよう」と仰せられた。何事も民の心をお取り入れになるわが皇室のおぼしめしがここにも現れたのでした。

平安京の制

平安の都は、大体は奈良の都にならって造られたが、それよりも少し大きかったです。即ち東西約42町、南北役49町（訳注：1町は400尺、約109m）にわたる長方形で、街路は碁盤の目のように正しく縦横に通じていました。

中央に、南北に通ずる朱雀大路という巾28丈（訳注：1丈は10尺、約3m）、即ち約47間（訳注：1間は6尺、約1.8m）の大通りがある、それに依って分かれた東を左京といい、西を右京といったことも、その大路に並んで四つの大通りのあったことも、また、東西に通ずる広い大路が九つあって、それを北から南へ一條、二條、三條と、九條までに分っていたことも、その大路の間に小路が縦横に通じていたことも、すべて奈良の都と同じでした。

大内裏は一條と二條との中央に設けられて、其の東西は約十町、南北は約十二町でした。その四方は廻らすに垣と溝を以てし、東西に各々四カ所と南北におのおの三ヶ所との御門がありました。

東の御門を北から数えてみると、上東門、陽明門、待賢門、郁芳門で、西の御門は上西門、殷富門、藻壁門、談天門、また、北の御門は東が達智門、西が安嘉門、中央が偉監門で、南の御門は東が美福門、中央が朱雀門です。

この朱雀門は即ち大内裏の正門であり、この御門から朱雀大路は始まって南に走っています。この大路の南端は、即ち平安京全部の正門で、これが有名な羅生門です。また、この都の周囲の全部にも垣と溝とがあって、それが京外との境となっていました。

大内裏

大内裏の中には内裏即ち皇居を始めとして大極殿及び諸官省が薨を並べていた。皇居は中央よりやや東北に位し、建礼門、承明門などの御門を以て二重にめぐらした中に、紫宸殿、清涼殿、温明殿などの17の御殿と、飛香舎、淑景舎、昭陽舎などの五舎が相列なっていました。

紫宸殿は天皇の政をご覧になるところで、清涼殿は常の御殿です。また、大極殿は朱雀門を入った突当りのところ、即ち正面にあつて、この御殿を応天門といった。大極殿は天皇が表立った儀式を行わせられる所です。

また、大路には柳と桜を植えて、街路をも美しくしようとした。後に或る歌人が
見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける
と歌っていますが、さぞ其頃は美しい、落ちついた感じを持った都であつたであろうと想像されます。

平安時代

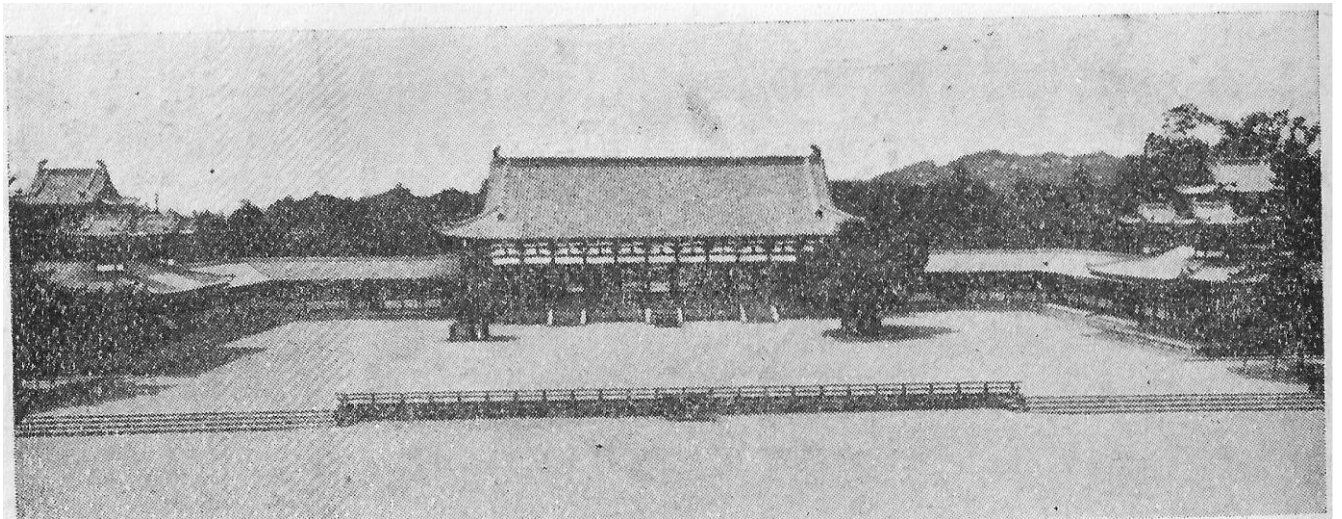
此の平安の都は、桓武天皇が延暦13年（西暦794年、訳注：鳴くよ うぐいす平安京）にお遷りになった時から明治天皇の明治2年（西暦1869年）に至るまで、1070余年の間、わが国の帝都として動かなかったのです。殊に桓武天皇から33代、源頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの凡そ400年の間は、常に政治の中心地となった処ですから、その間を特に名づけて平安時代といっています。

平安京と今の京都

しかし、市街の繁盛は、初めに計画したようには行かなかった。右京は早くからさびれ出して、住民は次第に左京に集まった。ついには東の京外にまで市街が広がって、更に賀茂川を越え、白河の里の方まで一帯に賑やかになって行きました。のみならず、後の世になってから、たびたび此の都で戦争が行われたために、火災にも罹ったりして、いよいよ様子が変わりました。今は昔の右京の大部分は田畑や工場となり、昔、平安京の中央であった朱雀大路は、今は京都市の殆ど西の端となって、其の名も変わっています。要するに、今の京都は、昔の左京と、其の東と北に広がった町とから出来ているのです。

平安神宮

しかしたとえ、斯ういう変遷があったとしても、今の京都の元は平安京であり、平安京は桓武天皇がお造りになったのでありますから、明治28年、平安奠都1100年祭の折に、其の記念に天皇を祀る官幣大社平安神宮が京都に建てられた。



京都

平安神宮

その拝殿は平安京の大極殿の形にならい、その門は応天門の形にならって造られましたから、これを見れば、昔の大極殿の有様を推しはかることも出来ます。

（第26話 平安奠都 終わり。 次は一旦前頁に戻り、

第27話 さかのうえ たむら まろ え ぞへいてい 坂上田村麻呂の蝦夷平定 へ）